# 第 二 部

# 個別の指導計画の作成と活用

# 目　　次

Ⅰ　個別の指導計画の基本的な考え方 ---------- 13
1　個別の指導計画の必要性 ---------- 13
2　個別の指導計画にかかわる実践上の課題 ---------- 14
3　課題解決に向けた工夫・改善 ---------- 15
4　個別の指導計画の作成と活用に当たっての留意点 ---------- 17
(1) 情報の集約・共有・引継ぎにおいて ---------- 17
(2) 子供の見方，とらえ方において ---------- 17
(3) 指導において ---------- 17

Ⅱ　個別の指導計画の構成（基本的な様式） ---------- 17
1　様式1「教育的ニーズ集約表」 ---------- 18
2　様式2「重点目標指導計画表」 ---------- 19
3　様式3「評価表」 ---------- 20

Ⅲ　個別の指導計画の作成 ---------- 21
1　作成の時期と内容 ---------- 21
2　作成の具体的手続き ---------- 23

参考文献 ---------- 28

# Ⅰ　個別の指導計画の基本的な考え方

## 1　個別の指導計画の必要性

現在，特殊教育においては，「個別の指導計画」が求められるようになってきている。その背景としては，以下のような社会的な要請を受けた教育改革の動向や保護者の意識の変化がある。

**社会的な要請を受けた教育改革の動向**

社会におけるノーマライゼーションやＱＯＬ向上の考え方の浸透，画一化教育への反省による個性尊重の考え方により，学校教育においても，現行学習指導要領に見られるように「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」「個性を生かす教育の充実に努める」などが強く求められるようになってきている。また，自立活動や重複障害の児童生徒に対する指導においては，これまでの経緯を踏まえて個別の指導計画の作成が明示されている。これまでも特殊教育においては，「生きる力」をはぐくむことを大切に教育実践を進めてきているが，これからはより一層一人一人の子供に視点を当てた取組が求められるようになってきている。この取組を支えるものの一つとして，一人一人の子供の指導の在り方について具体的に計画化された「個別の指導計画」が挙げられる。

**保護者の意識の変化**

近年の少子化の傾向と関連して，保護者の我が子の教育に対する意識や関心がこれまで以上に高まり，教育内容や指導方法に関する学校への要望が多くなってきている。また，本校では，「将来の生活」を視点としたこれまでの取組や学校週五日制の実施に伴い，現在及び将来の生活の質の向上を願うようになり，取り組んでいる教育内容がどの生活場面と関連があり，どのように役立つかを考えるようになってきている。教育的ニーズは，学校の場だけではなく，家庭や地域での生活の場においても存在するものである。したがって，教育の内容や方針を定める際は，保護者と連携を密にすることが大切である。そのためには，個別の指導計画を作成・活用し，インフォームド・コンセントやアカウンタビリティの考えを大切に，保護者の十分な理解と協力を得ながら，教育を効果的に推進していくことが求められている。

**個別的で多様である教育的ニーズへの対応**

学校教育における日々の実践の中で教育的ニーズにこたえていくためには，一人一人の子供に対する指導の最適化を常に目指すとともに，実態把握から指導目標の設定，支援の手立ての工夫等の過程において，複数の教師によるチームプレイが必要である。前者については，これまでも実際の指導場面において個への対応は行ってきているが，指導目標・指導内容・指導方法を明確化，文書化まではせずに取り組んできている経緯がある。そのために，教育的ニーズが個別的で多様であればあるほど，集団の場面においても，個別的な場面においても，一人一人の教育的ニーズに応じた指導という点では難しさがあった。後者については，一人一人の子供について教育的ニーズの相互理解，指導目標の焦点化，支援の明確化等，一貫した指導による効果的な教育の推進という点で課題があった。確かに，教育的ニーズに対応して指導の最適化を図るための検討の場や相互理解を図る機会が少なかった現状もある。これからは，一人一人に応じた指導に関する実践上の課題や情報

の集約・共有・引継ぎといった情報伝達システム上の問題を改善していく方策としても，個別の指導計画が求められる。

以上のことを踏まえ，本校における個別の指導計画は，次のような機能と役割を持つものにしたいと考えている。

**○　一人一人の子供の「豊かな生活につながる力」の向上　＜目的＞**
**○　一人一人の子供の実態の的確な把握　＜アセスメント＞**
**○　子供にかかわる情報の集約・共有・引継ぎ　＜データベース，情報システムの機能化，ティーム・ティーチングの向上＞**
**○　家庭等との連携・協力の推進　＜インフォームド・コンセント，アカウンタビリティ＞**

## 2　個別の指導計画にかかわる実践上の課題

本校においては，①指導目標・指導内容・指導方法を明確化・明文化すること，②子供や保護者との共通認識に基づく取組を行うこと，③前年度の取組内容を確実に引継ぎ書として残すことで継続的な指導を行うこと，の必要性から個別の指導計画を平成12年度に作成し，それに基づく実践と評価を行ってきた。その結果，現在及び将来の豊かな生活にとって何が必要かが明確になり，指導目標・指導内容・指導方法が具体的に示されるようになってきた。その一方で，「個別の指導計画を授業に生かす」という点からは，以下のような実践上の課題が浮かび上がってきた。

**子供の情報の整理，活用が不十分**

初期アセスメントの実施により確かに多面的な実態把握はできたが，多くの時間と労力を費やしたのに対して，その実践への活用は十分ではなかった。理由としては，各側面の情報を細かく収集したために子供の姿が細分化されてしまう傾向があったこと，収集した情報量が多かったために一つ一つについて分析が十分にできなかったこと，将来の願う生活像や領域別アセスメント等において実態把握の視点が幾つもあって一定していなかったことなどが挙げられる。

**教育的ニーズを導き出すまでの手続き，作業量が多い**

多面的な実態把握等に基づき教育的ニーズを導き出すことはとても大切なことではあるが，手続きや作業量が多いことは，把握した教育的ニーズへの対応を具体化し，実践していく際のデメリットになった。つまり，教育的ニーズを把握し，個別の指導計画を作成することに多大な時間を要し，これを実践に十分活用することで「一人一人に応じた指導」の一層の充実を図るという本来の目的まで結び付かない面があった。

**教育的ニーズに，いつ，どこで，どのようにこたえていけばいいかが分からない**

「家庭生活・個人生活」「社会生活」「働く生活」といった生活の場ごとに，将来の生活像を実現するための課題として教育的ニーズを記入していた。これを受けて指導の形態別に個別の指導計画を作成していたが，このつながりが見えない面があった。つまり，一人一人の子供の教育的ニーズが把握できても，それに，いつ，どこで，どのようにこたえていくかが明確ではなかった。

**チームで指導するための教師間の相互理解，情報の共有が不十分**

個別の指導計画作成の意義として，複数教師で検討，作成し，指導を展開することによる多面的な実態把握及び課題設定，組織的な指導，一貫性のある指導が挙げられる。しかし，子供の実態のとらえ方や指導の仕方にずれがあったり，担任が変わると指導内容が変わり継続していかなかったりした。その背景としては，子供にかかわる情報の集約・共有・引継ぎのための共通の視点や時と場の確保が十分とは言えない，実際の話し合いも担任が資料を提供して他の教師が質問をする形で終わることが多く，ともすれば担任の主観で目標設定や評価がなされる傾向がある，などがあった。

## 3　課題解決に向けた工夫・改善

従前の個別の指導計画にかかわる課題を踏まえ，解決に向けた取組を以下の３点から考えた。また，この考えに基づき，後述するように，新たな個別の指導計画の様式や個別の指導計画にかかわるシステムを考えた。

**教育的ニーズの導き出し方及び個別の指導計画の様式の検討**

本校では，教育的ニーズを「一人一人の子供の現在及び将来の豊かな生活を実現するために，子供自身や保護者の願い，教師の願い，社会の要請等を，総合的に考察した結果として導き出された課題」ととらえている。これまでは願う将来の豊かな生活像の実現を目指したいとの考えから，学校卒業時・後や学部卒業時に期待する姿を実現するための課題として，３～12年後の長期的な課題を教育的ニーズとして設定していた。しかし，そうすると前項で述べたように手続きや作業量が多くなるだけではなく，現在の状態像から見て一人一人の子供に大切と考えられる課題を具体的に検討していくのは難しく，どの子供にも共通するような抽象的で一般的なものになりがちであった。

そこで，教育的ニーズをより具体的なものにするために，１年のスパンで達成を目指す課題として考えるようにした。また，そのための実態把握から教育的ニーズの設定までを「豊かな生活につながる力」を視点として行うようにした。こうすれば，子供の情報の整理，手続き，作業コストの面においても改善が図れるのではないかと考えた。さらに，これに伴って個別の指導計画の様式は，「豊かな生活につながる力」を視点として，子供の状態像や教育的ニーズ，指導による変容が明確に分かるようなものにしたいと考えた。あわせて，本校の実践課題である「指導の継続性」や「家庭との一体的な取組」が図れるようにするためには，個別の指導計画の様式を全校的に統一する必要があると考えた。

**個別の指導計画と授業とのつながりの検討**

一人一人の子供の教育的ニーズに，いつ，どこで，どのようにこたえていくかが，これまでは明確になっていない状況があった。今次研究において，「いつ」「どこで」という点では，それは日々の実践の場である授業の中でであり，個別の指導計画は，授業に生かされて初めてその作成の意義があると考えた。また，「どのように」という点では，個別の指導計画を授業づくりに生かすときに，どんな資料を用いて，どのような手順で，個別の指導計画と授業とを関連付けて

いるかを明確に説明できなければならず，この点こそが最も重要で中核的な課題であると考えた。

そこで，今次研究においては，以下の二つの理由から，日々授業を行っている各学部において，それぞれに「個別の指導計画を生かした授業づくりの在り方」を探ってみることとした。一つには，各学部で大切にしている教育内容が異なり，指導の形態及びそれに伴う諸条件（授業づくりの手続き，指導体制，各教科等における週当たりの配当授業時数等）に独自性があるからである。実際，平成12年度の各学部における授業づくりを見ても，その設計－展開－評価の在り方は学部で異なっていた。二つには，自分たちの問題意識を大切にしながらその在り方を探っていくには，学部単位の方が検討していきやすいだろうと考えたからである。

つまり，個別の指導計画と授業とのつながりについては，各学部において，全校的に様式を統一する個別の指導計画と各教科等の指導計画との関連を図りながら，授業実践を積み重ねる中で明らかにしていきたいと考えた。

## 教師間及び教師と保護者間の連携の検討

一人一人の子供に対する指導効果を高めるためには，実態把握，教育的ニーズの把握，指導目標及び指導内容・方法の設定等において，担任だけでなく複数の教師で情報を収集，検討し，共通認識の下に，組織的で一貫性のある指導を行うことが大切である。そこで，指導にかかわる複数の教師が常に個別の指導計画に基づいて子供の情報の集約・共有・引継ぎができるように，そのための時間や場の設定を確実に行いたいと考えた。また，実際の話し合いについても，担任だけの考えによるのではなく，複数の教師による多面的な見方が本当に生かされるようにＫＪ法的な手法（※注）を取り入れていきたいと考えた。

さらに，保護者との連携においては，子供自身や保護者の思いや願いを踏まえながら教育的ニーズを導き出し，個別の指導計画を作成してきたが，どうしても教師の考えをベースとして，保護者に理解してもらう傾向があった。そこで，「教育的ニーズを語る会」については，学校側が作成した資料を保護者に提示して質問や要望を出してもらうといった話し合いの仕方を工夫することとした。つまり，一体的な取組をより一層推進していく立場から，保護者と学校がそれぞれの考えを事前に出し合い，当日はお互いの考えを照らし合わせていく方法を取りたいと考えた。

---

注）ＫＪ法とは？

文化人類学者の川喜田二郎氏（元東京工業大学教授）が考案した創造性開発の技法で，川喜田氏の頭文字を取って「ＫＪ法」と名付けられている。ＫＪ法は，あるデータから得られる雑多な情報を小さなカードに一つずつ書き込み，表札を付けながら親近性のあるカードを集めて小グループ，中グループ，大グループへと組み立てて図解していくものである。ＫＪ法は，データの処理やまとめとして使われるだけでなく，作業を進め，発想を繰り返す過程で，テーマの解決に役立つヒントや次の方向性を示唆するものであり，教育活動の改善に有効な技法として考えられている。

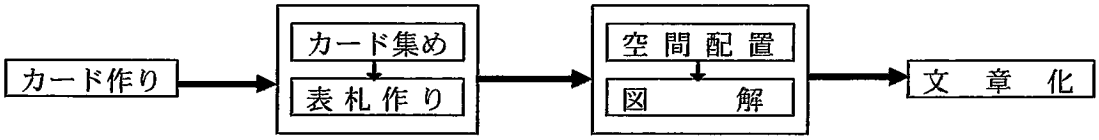


**図１　ＫＪ法の基本的な四つの手順**

## 4　個別の指導計画の作成と活用に当たっての留意点

### (1) 情報の集約・共有・引継ぎにおいて

○　情報の集約・共有においては，考え方を一致させることよりも，まずはお互いの考えを出し合って知ることを重視し，教育的ニーズを語る会や各種ミーティングの際の資料や進め方などの運営の在り方を工夫する。

○　個別の指導計画を用いて子供にかかわる情報の集約と共有を行うとともに，学年間・学部間における引継ぎ資料としても活用し，指導の継続性が図られるようにする。

○　子供自身や保護者の思いや願いを家庭訪問や調査票等で把握するとともに，現在及び将来の豊かな生活を実現するために必要なことを多面的に話し合う「教育的ニーズを語る会」を実施し，家庭と学校とが共通認識に基づいた一体的な取組を進められるようにする。

○　評価については，担任間や担任と授業担当者間での情報交換を行う機会を持つとともに，個別の指導計画に基づく保護者との評価も，教育相談等を設定して確実に行うようにする。

○　個別の指導計画の作成に当たっては，子供理解のための情報が必要なときにはいつでも見ることができるとともに，情報の一元化の点からコンピュータ入力とする。管理，保管については，個人情報が外部に漏れないように慎重に取り扱う。また，開示については，保護者からの申請あるいは了解がある場合のみ，関係機関等への提示を行う。

### (2) 子供の見方，とらえ方において

○　学校生活だけでなく子供の生活を丸ごととらえられるように，生活スケジュールや生活地図等による家庭生活，地域生活における実態把握も行うようにする。

○　子供の状態像や教育的ニーズを把握する際は，教師間及び教師と保護者間において共通の観点で話し合いができるように，「豊かな生活につながる力」の各領域をその観点とする。

○　子供をある面（領域）からだけとらえたり，分析的に細かく見たりするだけでなく，全人的な成長・発達を考え，子供の情報を総合的に見て，全体像を把握するようにする。また，この全体像から「中心的な課題」をとらえるようにする。

○　個性を生かすという点から，できなさや問題行動等にのみ注目するのではなく，よさや得意なこと，興味・関心のあることなどに積極的に着目する。

### (3) 指導において

○　子供の指導に当たっては，教師によって異なる対応にならないように，個別の指導計画を基に学部ミーティング・授業づくりミーティングを実施し，教師間で指導目標や指導内容・方法等についての相互理解を図り，一貫した指導，組織的な指導を行うようにする。

○　様々な指導の形態における取組は，個別的なものではなく，有機的なつながりを持つものにしていく。同時に，指導の形態間における指導内容の重複，欠落について見直し，精選，重点化を図る。

○　個別の指導計画を生かした授業づくりにおいては，観察可能で評価可能な具体的な目標を設定するとともに，目標を設定した時点で評価基準も明確にしておくことで評価を確実に行い，その評価結果を確実に次の教育実践に生かすようにする。

# Ⅱ　個別の指導計画の構成（基本的な様式）

本校の小・中・高等部にわたり，様式を統一している個別の指導計画は，次の三つの様式から構成している。

## 1　様式１「教育的ニーズ集約表」

現在における子供の状態像及び教育的ニーズを把握するためのもので，本校の個別の指導計画の基礎となる。子供の状態像及び教育的ニーズを把握する際の項目は，「豊かな生活につながる力」を構成している四つの力（自らしようとする力，日常生活に必要な力，生活の幅を広げていく力，共に生活する力）の各領域である。子供の状態像を把握し記入する際は，知識・技能面だけでなく，意欲・態度面も含めて記入するようにしており，結果的に「自らしようとする力」も同時的に含んで把握することになると考えている。

| 氏　名 | ○○　○○ | 学部 | | 年 | | 記入者 | △△　△△ | 作成日 | 平成 □・□・□ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

＜子供自身及び保護者の願い＞

「将来の生活の希望と今後の願い」に記入されている内容や家庭訪問等で保護者から聞き取った子供自身及び保護者の願いについて記入する。

| 豊かな生活につながる力 | | 子供の状態像（現在の様子） | 教育的ニーズ | 指導の場 |
|---|---|---|---|---|
| 自らしようとする力 | 日常生活に必要な力 | 身辺処理 | | |
| | | 健康安全体力 | | |
| | 生活の幅を広げていく力 | コミュニケーション | | |
| | | 言語・数量 | | |
| | | 余暇活動 | | |
| | 共に生活する力 | 社会性・集団参加 | | |
| | | 家庭生活 | | |
| | | 地域生活 | | |
| | | 職業生活 | | |
| 全　体　像 | | | | |

・　記入に当たっては，「日常生活に必要な力」「生活の幅を広げていく力」「共に生活する力」の各領域である「身辺処理」「健康・安全・体力」「コミュニケーション」「言語・数量」「余暇活動」「社会性・集団参加」「家庭生活」「地域生活」「職業生活」の9領域をその項目とする。
・　初期アセスメントにより明らかになった現在の子供の様子について，各領域ごとに記入する。ただし，子供の実態を細かに記入するのではなく，全体像を把握する際に必要となる様子を中心に記入する。

・　子供自身や保護者の願いに，教師の願い，社会の要請等を加え，現在の子供の状態像を踏まえて総合的に考察した結果として導き出された課題を各領域ごとに記入する。
・　どの領域も教育的ニーズとして取り組みたい課題が多数挙がってくることが予想されるが，各領域において今年度優先的に取り組みたい課題に絞り込んで記入する。

・教育的ニーズの検討・設定段階で想定した学習場面を各領域ごとに記入する。

・　各領域ごとの子供の状態像と教育的ニーズ及びその子供のよさや興味・関心から全体像をとらえ，指導方針を加えて記入する。

## 2 様式２「重点目標指導計画表」

様式1「教育的ニーズ集約表」を活用して，一人一人の子供の全人的な成長・発達において最重要視される個別の目標を達成するための指導内容・指導方法をまとめた表である。

| 氏　名 | ○○　○○ | 学部 | | 年 | | 記入者 | △△　△△ | 作成日 | 平成 □・□・□ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

| | |
|---|---|
| 全体像からとらえた重点目標 | ・　様式1の9領域にわたって挙げられた教育的ニーズのうち，全体像からその子供の中心的な課題をとらえた上で，最も優先順位の高い教育的ニーズ，あるいはこれと関連の強い教育的ニーズを重点目標として設定し記入する。<br>・　重点目標は，年間目標とし，今年度1年間で達成できると思われる目標を記入する。 |
| 重点目標設定理由 | ・　重点目標を導き出した根拠，設定した理由を記入する。<br>・　現在の子供の状態像から見て適切で，現在及び将来の豊かな生活に本当につながるような課題選択，目標設定であるかを確認するとても重要な項目である。 |
| 短期目標 | ・　課題分析を行い，重点目標を達成するための具体的な下位目標を記入する。<br>・　短期目標は，基本的には学期を単位とする。 |
| 指導の場 | ・　短期目標に取り組む学習場面を記入する。 |
| 支援の手立て | ・　短期目標を達成するための指導内容や指導方法を，だれが見ても手続きが分かるように，できるだけ具体的に記入する。<br>・「目標の到達度」については，以下の3段階評定の上，具体的に記入する。<br>A:完全に達成できた。<br>B:ほぼできるが，定着までには至っておらず，部分的な支援が必要である。<br>C:できたり，できなかったりで安定しておらず，かなり多くの支援が必要である。 |
| 評価 | ＜目標の到達度＞<br>＜目標の到達度＞<br>・　次学期の目標設定や支援の手立ての工夫に生かせるように，学期末に「目標の到達度」「手立ての有効性」「目標の妥当性」の三つの観点から，評価し，記入する。<br>＜手立ての有効性＞<br>・「手立ての有効性」については，手立ては段階的，具体的に考えられていたか，指導する人や場の設定等は適切であったかについて記入する。<br>・「目標の妥当性」については，目標は教育的ニーズを踏まえたものであったか，具体的であったか等について記入する。<br>＜目標の妥当性＞ |

## 3　様式３「評価表」

様式1「教育的ニーズ集約表」の教育的ニーズ及び様式2「重点目標指導計画表」の重点目標に，授業等を通してどのようにこたえてきたか，その指導経過と成果をまとめる表である。

| 氏　名 | ○○　○○ | 学部 | | 年 | | 記入者 | △△　△△ | 作成日 | 平成 □・□・□ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

| 豊かな生活につながる力 | | | 1　学　期 | 2　学　期 | 3　学　期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 自らしようとする力 | 日常生活に必要な力 | 身辺処理 | | | |
| | | 健康安全体力 | | | |
| | 生活の幅を広げていく力 | コミュニケーション | | | |
| | | 言語・数量 | | | |
| | | 余暇活動 | | | |
| | 共に生活する力 | 社会性・集団参加 | | | |
| | | 家庭生活 | | | |
| | | 地域生活 | | | |
| | | 職業生活 | | | |

・　様式1に記されている「豊かな生活につながる力」の各領域ごとの教育的ニーズに，どのようにこたえ，子供たちは「豊かな生活につながる力」をどの程度高めることができたか，学期末に以下の3段階評定で評価する。
　A:完全にできた。
　B:ほぼできるが，定着までには至っておらず，部分的な支援が必要である。
　C:できたり，できなかったりで安定しておらず，かなり多くの支援が必要である。
※　教育的ニーズは年間をスパンとしているので，1．2学期は形成的評価，3学期は総括的評価になる。
・　指導の経過と成果について記入する際は，子供の状態像の変化が保護者に伝わりやすいように具体的に記入する。必要に応じて，指導の形態名や単元・題材名についても記入する。

| 総合所見 | | | |
|---|---|---|---|

・　全体像から見て最も変容のあった点や生活場面への般化が見られた点，あるいは9領域の評価においてまだ触れていない点について記入する。また，必要に応じて次学期の展望についても記入する。なお，3学期の総合所見欄には，次年度への引継ぎ事項について触れる。

# Ⅲ　個別の指導計画の作成

## 1　作成の時期と内容

### 4　月

**ア　行動観察**

新年度が始まったら，前年度までの取組や諸検査等から得た情報を参考にしながら，実際の子供とのかかわり合いを通して，一人一人の子供を知ることがまずは大切である。この際は，「豊かな生活につながる力」の各領域を観点として子供をとらえ，各領域ごとに得られた情報をクロスさせて一人一人の子供を総合的に理解する。

**イ　家庭訪問（面談），生活に関する調査**

子供の全体像を的確に把握しようとすれば，学校生活における姿だけでなく，家庭生活・地域生活における子供の姿も知る必要がある。また，年度当初に当たり，保護者の願いや考えを十分に受け止めておく必要がある。家族や生育歴，教育歴などプロフィールに関する情報は前年度までのものを確認しておくだけでもよいが，家庭訪問等を実施するに当たっては，「生活スケジュール」「生活地図」「将来の生活の希望と今後の願い」について事前に調査をしたり，これまでのものを参考にしたりして，十分に話し合う。

**ウ　教育的ニーズの仮設定（学部ミーティングⅠ）**

行動観察，保護者へのアンケート調査等，学校生活・家庭生活・地域生活における実態把握から得た情報を，様式１「教育的ニーズ集約表」に「豊かな生活につながる力」の各領域ごとに現在の子供の状態像として担任がまとめる。そして，この資料と前年度の様式３「評価表」等を参考にして，学部の複数の教師によって，各領域ごとに教育的ニーズの検討，仮設定を行う。

### 5　月

**ア　保護者との教育的ニーズの検討（教育的ニーズを語る会）**

現在の子供の状態像をまとめた様式１「教育的ニーズ集約表」を保護者に提示し，保護者にも「豊かな生活につながる力」の各領域ごとの教育的ニーズを事前に考え，記入してもらう。そして，子供と保護者，担任，他学部教師を参加者とする「教育的ニーズを語る会」を開き，保護者と学校の両者がそれぞれに考えた教育的ニーズの相互理解と調整を行う。会においては，現在及び将来の生活に役立つか，具体的な手立てや指導の場が想定でき指導可能かといった観点から検討し，今年度の教育的ニーズと指導の場を設定する。

**イ　全体像及び重点目標の検討（学部ミーティングⅡ）**

教育的ニーズを語る会等を通して把握した「豊かな生活につながる力」の各領域ごとの子供の状態像と教育的ニーズ及びその子供のよさや興味・関心に，指導方針を加えて，全体像としてまとめる。また，全体像からその子供の中心的な課題をとらえ，重点とする長期目標及び短期目標

を設定し，目標達成のための指導内容，指導方法を具体的に作成する。

このとき，学部の複数教師によって，重点目標設定理由が全体像から見て本当に適切な課題選択，目標設定になっているか，また支援の手立てが具体的で手続きが明確であるかについての検討を行う。

**ウ　「教育的ニーズ集約表」及び「重点目標指導計画表」の提示**

教育的ニーズを語る会や学部ミーティングⅡを経て最終的に立案した様式１「教育的ニーズ集約表」及び様式２「重点目標指導計画表」を保護者に提示し，確認し合う。最終的に決定するまでは，連絡帳を活用したり，文書をやり取りしたりしながら保護者との相互理解を図るとともに，家庭で取り組む事柄については，具体的な支援の方法を一緒に考え，文書として残していく。

**６月～７月**

個別の指導計画を生かした実践を行う。

**７月～８月**

**ア　１学期の評価**

１学期のまとめの時期として，個別の指導計画を生かした１学期の実践の評価を行う。

様式１「教育的ニーズ集約表」に記されている「豊かな生活につながる力」の各領域ごとの教育的ニーズに，授業を通して具体的にどのようにこたえてきたかについては，担任と授業担当者が情報交換を行い，その指導経過を様式３「評価表」にまとめる。

**イ　重点目標（１学期短期目標）の評価と２学期短期目標の検討（学部ミーティングⅢ）**

様式２「重点目標指導計画表」に記されている短期目標の評価に当たっては，その結果を次の目標設定や実際の指導に生かすことができるようにしていきたい。したがって，目標の到達度だけでなく，手立ての有効性や目標の妥当性といった教師側における指導の評価も同時に行うようにする。そして，その評価結果を踏まえて，２学期の短期目標と支援の手立ての検討を行う。

**ウ　１学期の取組の説明と２学期の短期目標の提示（教育相談Ⅰ）**

１学期の評価について，様式２「重点目標指導計画表」と様式３「評価表」を資料として保護者との話し合いを行う。その際にはアカウンタビリティ（説明責任）の考えに基づき，「何を，どのように取り組んだか」，「その結果，どのような変容が見られたか」，「次の課題はどのようなことか」について，保護者に具体的に分かりやすく説明する。これと併せて，様式２「重点目標指導計画表」における２学期の短期目標について提案し，相互理解を図る。

**９月～12月**

個別の指導計画を生かした実践を行う。ただし，期間が長いことから，取組の経過については，連絡帳をはじめ学校参観日等の機会を利用して保護者に十分に伝えることで，連携・協力を図る。また，取組の状況に応じて，指導目標・指導方法の修正を行い，効果的な実践に努める。

**12　月**

**ア　２学期の評価**

２学期のまとめの時期として，個別の指導計画を生かした２学期の実践の評価を行う。

１学期末と同様に，担任が授業担当者と情報交換を行い，その指導経過を様式３「評価表」にまとめる。

**イ　重点目標（２学期短期目標）の評価と３学期短期目標の検討（学部ミーティングⅣ）**

１学期末と同様に，様式２「重点目標指導計画表」に記されている２学期の短期目標について評価を行う。そして，その評価結果を踏まえて，３学期の短期目標と支援の手立ての検討を行う。

**ウ　２学期の取組の説明と３学期の短期目標の提示（教育相談Ⅱ）**

２学期初めと同様に，様式２「重点目標指導計画表」と様式３「評価表」を資料として２学期の取組の説明と３学期の短期目標の提示を保護者に対して行う。

**１月～２月**

個別の指導計画を生かした実践を行う。

**３　月**

**ア　３学期の評価（学部ミーティングⅤ）**

これまでと同様の手続きで，３学期の実践についての評価を行うとともに，１年間の取組について評価を行う。引継ぎ事項等，次年度の指導の参考になる事柄については，様式２「重点目標指導計画表」の評価欄及び様式３「評価表」の総合所見欄に記入し，学部の複数の教師で検討，確認する。

**イ　保護者との今年度の取組の評価と確認（教育相談Ⅲ）**

学部で検討し修正した様式２「重点目標指導計画表」と様式３「評価表」を資料として，保護者の評価も加え，今年度の取組，子供の変容，次年度に向けての課題等について相互理解を図る。

**ウ　学部間連絡会の実施（次年度４月の実施）**

小学部から中学部，中学部から高等部への進学の際に，当該学部・学年の担任で連絡会議を実施し，個別の指導計画を基に，これまでの指導の経過と成果，課題の確認等の引継ぎを行う。

## 2　作成の具体的手続き

**教育的ニーズの把握**

個別の指導計画の作成において明確にしておくべきことは，一人一人の子供の教育的ニーズである。そのためには，子供の情報を整理し，的確な実態把握をすることが大切であり，本校では子供

の過去の成長の様子，現在の状態，期待する将来像の把握に努めている。具体的には，以下の手続きで，教育的ニーズを導き出す。

**ア　担任による様式１「教育的ニーズ集約表」の作成**

行動観察，子供及び保護者の将来の生活に関する希望や願い，生活スケジュール，生活地図，諸検査結果等を参考として，担任が様式１「教育的ニーズ集約表」の＜子供自身及び保護者の願い＞＜子供の状態像＞をまとめる。

**イ　学部ミーティングⅠの実施**

個別の指導計画の作成段階においては，子供を取り巻く複数の教師の様々な見方，考え方を情報として集めるとともに，それらを整理，統合していくことが大切である。学部ミーティングⅠは，学部の複数教師により一人一人の子供の実態や教育的ニーズを多面的にとらえ，協議・検討していく場であり，この過程自体が教師間の相互理解，情報の共有を図るものである。実際には，ＫＪ法的な手法を取り入れ，次のように学部ミーティングⅠ（子供一人当たり30分程度）を進める。

① 担任が様式１「教育的ニーズ集約表」について説明し，参加者は不足している情報を補ったり，質問したりする。
② 参加者は，「豊かな生活につながる力」の９領域の中で，重要性が高いと自分が考える領域の教育的ニーズ（年間を単位とした課題）を短冊カード（一人３～４枚程度）に記入する。
③ 「豊かな生活につながる力」の各領域ごとにカードを振り分ける。参加者は自分が最も重要度が高いと考える項目の教育的ニーズについて説明・補足をする。
④ 内容が似ているカードをまとめたり，各領域ごとの関係やつながりを把握したりしながら全体像を明確にするとともに，協議・検討を通して学部として考える各領域ごとの教育的ニーズと，その中でも重要度が高いと考える教育的ニーズを決める。
⑤ 担任は，学部ミーティングⅠにおける話し合いに基づき，後日様式１「教育的ニーズ集約表」を修正し，学部における教師集団が考える教育的ニーズとして仮設定する。

このような学部ミーティングⅠの実施は，個別の指導計画の実践段階において，情報の共有の下に円滑なチームプレイをもたらすことになると考えている。

**ウ　「教育的ニーズを語る会」の実施**

家庭との連携・協力による一体的な取組を意図するとき，両者が同じ認識の下に取り組んでいくことは大切である。子供自身や保護者の願いや考えを尊重した話し合いをすることで，よりよい連携を図ることができると考えている。そこで，「教育的ニーズを語る会」の実施に当たっては，以下の二つのことを大切にする。

一つ目は，「できるだけ多面的な視点からの話し合いを行う」ということである。具体的には，保護者間で考え方が異なる場合も少なくないので，家庭において子供にかかわるすべての人にできるだけ出会うように依頼し，無理な場合は事前に家庭で十分話をしてもらうようにする。また，学校側も担任だけではなく必要に応じて他学部の教師も参加し，教師の専門性という立場から話ができるようにする。

二つ目は，「学校と家庭が同じ認識の基に取り組んでいけるように会の進め方を工夫する」ということである。子供自身や保護者の願いや考えを尊重すると言いながら，教師の考えがベースとなり，保護者に理解してもらう傾向があったのである。具体的には，事前に保護者と学校がそれぞれの考えを出し合い，会の中ではお互いの考えを照らし合わせていくようにする。

| | |
|---|---|
| 事前準備 | ○　余裕を持って保護者の希望日を聞きながら，日時や参加者を決定し，連絡をする。<br>○　事前に様式１「教育的ニーズ集約表」の＜子供自身及び保護者の願い＞＜子供の状態像＞を記入したものを保護者に提示する。<br>⬇<br>保護者は，「豊かな生活につながる力」の各領域ごとに教育的ニーズを記入し，提出する。<br>⬇<br>前日までに，家庭と学校がそれぞれに考えた教育的ニーズを併記したものを会の参加者に資料として配付する。 |
| 参加者の事前打合せ会 | ○　会の資料等を確認し合うとともに，子供についての情報交換や会で話題になりそうなことについて話し合う。 |
| 「教育的ニーズを語る会」の実施(80分) | ①　会の趣旨や会順等についての説明を行う。<br>②　「豊かな生活につながる力」の各領域ごとに，家庭と学校がそれぞれ考える教育的ニーズについて説明する。次に，教育的ニーズの照らし合わせ，とらえ方のずれの調整・確認を以下の観点で行い，今年度の教育的ニーズとして決定する。<br>・　現在の子供の状態像から見て適切か。<br>・　現在及び将来の生活に役立つか。<br>・　緊急度が高かったり，ニーズが強かったりするか。<br>・　具体的な手立てや指導の場が想定でき，指導可能か。<br>・　いろいろな場面につながるか。　など<br>③　「豊かな生活につながる力」の各領域ごとの教育的ニーズの中でも，重要度が高いと思われるものについては，できるだけ指導内容・指導方法についても具体的に話し合う。<br>④　他学部の教師は，会の進行状況に応じて所属学部や専門的な立場から適宜意見を述べたり，進路等について保護者からの要請がある場合に情報の提供を行ったりする。<br>⑤　話し合った教育的ニーズについて参加者で確認し合う。そして，今日の話し合いを基に様式１「教育的ニーズ集約表」及び様式２「重点目標指導計画表」を作成し，学部ミーティングⅡを経てから提示することを伝える。また，これからの取組についての評価は，教育相談等の場で行っていくことを伝える。 |

**重点目標（年間目標），短期目標（学期目標）及び指導の場，支援の手立ての決定**

### ア　担任による様式２「重点目標指導計画表」の作成

様式１「教育的ニーズ集約表」を活用して，今年度１年間重点的に取り組む個別の目標を達成するための指導内容・指導方法を検討する。

まずは，全体像からその子供の中心的な課題をとらえた上で，「豊かな生活につながる力」の９領域の中で最も優先順位の高い教育的ニーズ，あるいはその教育的ニーズと関連の強いものを重点目標とする。次に，重点目標と考えるに至った理由を，「教育的ニーズを語る会」における話し合いを踏まえて，現在及び将来の豊かな生活につながるものであるという観点から文章化して明確にする。そして，重点目標（年間目標）を達成するための具体的な下位目標を，学期を単位とする短期目標として記入する。さらに，設定した短期目標を達成するための指導の場や支援の手立てについて記入する。具体的には，目標行動を課題分析し，「いつ」「どの場面で」「だれが」「どのような手続きで」について記入する。

### イ　学部ミーティングⅡの実施

担任作成の様式２「重点目標指導計画表」を，学部の複数教師によって以下の観点から検討する。

- 挙げられている目標（課題）よりも優先度が高いと考えられるものは，ほかにないか。
  - 例えば，
    - 緊急度が高い。
    - 本人及び保護者のニーズが強い。
    - 教師のニーズが強い。
    - いろいろな場面につながる。
    - 問題発生の頻度が高い。　　といった必要度の点から
- 重点目標設定理由について，全体像から見て，本当に適切な課題選択，目標設定であるか。
- 目標行動の課題分析により，段階的な目標設定がなされているか。
- 指導場面が明確にイメージできるほど，支援の手立てが具体的に記入されているか。

### ウ　様式２「重点目標指導計画表」の提示

学部ミーティングⅡを経て最終的に立案した様式２「重点目標指導計画表」を，様式１「教育的ニーズ集約表」とともに保護者に提示し，確認し合う。この際，重点目標及び各領域ごとの教育的ニーズの中で，家庭が適切な指導の場であると考えられる事柄については，支援の手立て等について一緒に具体的に考え，様式２を利用するなどして文書として残していく。これも含め，様式２「重点目標指導計画表」が最終的に決定するまでは，連絡帳を活用したり，文書をやり取りしたりして，相互理解が図れるようにする。

（文責：濵﨑信一）

| 手　続　き（作成の流れ） | 時期 | 担当者，関係者 | 方法，書類（■）など |
|---|---|---|---|
| **1　実態把握**<br>◆実態の記入（様式1「教育的ニーズ集約表」）<br>○担任が，子供の学校生活及び家庭・地域生活における実態把握を行う。 | 4 月 | 担任<br>保護者<br>学部教師<br>外部機関関係者 | 家庭訪問<br>■生活スケジュール<br>■生活地図<br>■将来の生活の希望と今後の願い<br>行動観察<br>諸検査<br>■前年度までの個別の指導計画<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」 |
| **2　教育的ニーズの把握**<br>◆教育的ニーズの記入（様式1「教育的ニーズ集約表」）<br>○「学部ミーティングⅠ」及び「教育的ニーズを語る会」の話し合いの中で，「豊かな生活につながる力」の各領域ごとに検討，決定する。 | 5 月 | 担任<br>保護者<br>学部教師<br>他学部教師 | 学部ミーティングⅠ<br>教育的ニーズを語る会<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」 |
| **3　重点目標の設定**<br>◆重点目標の設定（様式2「重点目標指導計画表」<br>○担任が作成した様式2を，学部ミーティングⅡで検討，決定する。 | 5 月<br><br>7 月<br><br>12月 | 担任，学部教師，保護者<br><br>担任，学部教師，保護者<br><br>担任，学部教師，保護者 | 学部ミーティングⅡ<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」<br>■様式2「重点目標指導計画表」<br>学部ミーティングⅢ<br>教育相談Ⅰ<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」<br>■様式2「重点目標指導計画表」<br>学部ミーティングⅣ<br>教育相談Ⅱ<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」<br>■様式2「重点目標指導計画表」 |
| **4　指導計画の作成**<br>◆指導計画の作成<br>○各学部において，様式1や様式2を生かして，指導の場に応じた具体的な指導計画を作成する。 | 年間 | 授業担当者 | 授業づくりミーティング<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」<br>■様式2「重点目標指導計画表」 |
| **5　実際の指導**<br>◆実際の指導<br>○作成した指導計画に基づいて指導を行う。<br>○指導の記録を取る。 | 年間 | 担任<br>学部教師<br>保護者 | 学校での指導<br>授業研究<br>事例研究<br>家庭・地域での指導 |
| **6　評　価**<br>◆指導の評価<br>○重点目標（短期目標）の到達度・妥当性，手立ての有効性の評価を行い，次学期の目標や支援の手立てについて検討する（様式2「重点目標指導計画表」）。<br>○各領域ごとの教育的ニーズに，授業でどのようにこたえてきたか，その指導の経過と成果をまとめる（様式3「評価表」）。 | 7月<br><br>12月<br><br>3 月 | 担任，学部教師，保護者<br><br>担任，学部教師，保護者<br><br>担任，学部教師，保護者 | 学部ミーティングⅢ<br>教育相談Ⅰ<br>■様式1，2，3<br>学部ミーティングⅣ<br>教育相談Ⅱ<br>■様式1，2，3<br>学部ミーティングⅤ<br>教育相談Ⅲ<br>■様式1，2，3 |
| **7　情報の蓄積と引継ぎ**<br>◆情報の蓄積<br>○個人ファイルに，年度ごとの教育的ニーズ，取組，評価等の情報を蓄積する。<br>◆情報の引継ぎ<br>○年度当初，学部間・学年間の引継ぎを行う。 | 3 月<br>4 月 | 担任<br>学部教師<br>他学部教師 | 学部間連絡会<br>■様式1「教育的ニーズ集約表」<br>■様式2「重点目標指導計画表」<br>■様式3「評価表」 |

**図２　個別の指導計画にかかわるシステム**

# 参 考 文 献


○ 阿部信行（2002）：個別の指導計画作成と活用－生きる力につながる観点別計画と指導の形態計画－ 特別支援教育 No. 5 pp. 42-47

○ 秋田大学教育文化学部附属養護学校（1999）：研究紀要第25集「生活する力を高める指導 その６」

○ 江口由美（1999）：個別指導計画の立案と作成その流れとフォーマット 実践障害児教育 Vol. 308 pp. 12-17

○ 橋本創一（2001）：知的障害教育における個別教育計画の現状と課題 太田昌孝代表 発達障害児の個別教育計画に伴う教員支援システムの構築 平成10～12年度科学研究費補助金研究成果報告書 pp. 50-58

○ 北海道立特殊教育センター（1998）：個別の指導計画の作成と活用－子どもが変わる，授業が変わる－

○ 古川勝也（2000）：自立活動における個別の指導計画 肢体不自由教育 第147号 pp. 19-25

○ 日向正昭（1999）：「個別の指導計画」の作成の現状と課題－「個別の指導計画」を活かす校内システムの在り方について－ 平成11年度国立特殊教育総合研究所長期研修成果報告書

○ 茨城大学教育学部附属養護学校（1999）：研究紀要第20集「個人カルテと指導プログラムを活用した指導法の探究」－指導システムの充実と完成を目指して－

○ 今井基（2001）：個別の指導計画を授業に活かすシステム－設定した児童の課題をどのように扱うか－ 特別支援教育 No. 4 pp. 46-51

○ 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2001）：研究紀要第13集「一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいか」－教育的ニーズの把握と指導内容・方法の整備－

○ 笠原芳孝（2002）：個別の指導計画の授業への生かし方とその基本的な考え方 特別支援教育 No. 5 pp. 37-41

○ 川住隆一（2002）：個別の指導計画の評価 特別支援教育 No. 6 pp. 38-43

○ 木村宜孝（2001）：個別の指導計画の作成の必要性～実態把握を中心に～ 特別支援教育 No. 3 pp. 37-40

○ 三重大学教育学部附属養護学校（2000）：研究紀要第17集「重点課題に基づく個に応じた指導－システムの整備と指導方法の追究－

○ 長野清恵（2001）：個に応じた指導の充実を図る個別の指導計画の作成と活用～的確な実態の把握を通して～ 特別支援教育 No. 3 pp. 46-51

○ 中川修一（2002）：個別の指導計画に基づく指導における評価－本校における個別の指導計画システムの実際と評価－ 特別支援教育 No. 6 pp. 44-49

○ 岡山大学教育学部附属養護学校（2002）：研究紀要第14号「個に応じた指導を行うための個別の指導計画の作成と活用」

○ 佐賀大学文化教育学部附属養護学校（2000）：研究紀要第10集「社会生活への移行をすすめるためるための小・中・高一貫した教育支援の在り方」

○ 社会福祉法人 日本肢体不自由児協会（1998）：特集 個別指導計画の展開 肢体不自由教育 第136号

○ 清水貞夫編（1997）：障害児教育における授業改善の技法 学苑社

○ 清水貞夫監・三浦光哉編・宮城教育大学附属養護学校ＩＴＰ研究会（2000）：新・個別の指導計画と個別アプローチプラン－日本型ＩＥＰの実現を目指して－ 学苑社

○ 高山佳子編（2000）：個別教育計画のためのはじめての特別なニーズ教育 川島書店

○ 宇都宮大学教育学部附属養護学校（1999）：研究紀要第17号「一人一人の豊かに生きる力を育む教育の実践」

○ 横浜国立大学教育人間科学部附属養護学校（2000）：横国式個別教育計画ハンドブック

○ 財団法人 安田生命社会事業団（1995）：個別教育計画の理念と実践－ＩＥＰ長期調査研究報告書－

○ 全国知的障害養護学校長会編（2000）：個別の指導計画と指導の実際 東洋館出版社